

農水産業 ITで推進

鳥羽市の鳥羽商船高専で学生を指導しながら、デジタル技術を活用したスマート水産業・農業を推進し、地域課題の解決に取り組み。「今までなかったものを生み出す側になれるのが面白い」と熱意は尽きない。

(鈴木沙弥)

鳥羽商船高専の副校長

江崎 修央さん

同市出身。中学生だった1980年代ごろにパソコンが普及し、各家庭に入り始めた。うちにもあったし、地元の小さなパソコン店へ通って、店主さんに話を聞いた」と懐かしむ。当時、鳥羽商船高専に電子機械工学科が新設されたばかり。「コンピュータやプログラミングの勉強ができるかも」と胸を躍らせ進学したが、実際は機械工学が主体だった。「でもロボコンにも出場し、楽しい学生生活だった」と笑う。

卒業後は豊橋技術科学大(愛知県豊橋市)で、念願だった情報関連の分野を学んだ。修士課程修了後は大手工作機械メーカーで働いたが、鳥羽商船高専で教員の求人があり、「地元で働き、技術を社会で生かすことや教育に携わりたい」と98年に母校に戻った。当初はプログラミングや情報リテラシーを教えていた。転機

は10年ほど前。県農業研究所の頼みで、害獣捕獲のおりの遠隔監視と操作ができるアプリを開発。地域で働くうち、水産業や農業など生産者側との関わりも広がり、依頼が舞い込むように。地域が少子高齢化や過疎化に直面する中、養殖マダイに遠隔で餌やりができるシステムなど、情報通信技術(ICT)や人工知能(AI)で要望に応える技術を開発してきた。

2021年には、伊勢市の電子機器メーカー「アイエスイー」と共同開発した海洋観測システム「つみログ」を商品化した。海上の機器で水温、潮位、塩分濃度、画像などの海況データを収集し、利用者はスマートフォンやパソコンから確認できる。現在は全国100カ所以上で稼働し、真珠、カキ、ノリなどの養殖業者らに活用されている。

校長と情報機械システム工学科教授を務め、学生の指導やスマート水産業・農業の社会実装に取り組む。

えさぎ・のぶお 1971年、鳥羽市生まれ。鳥羽商船高専、豊橋技術科学大大学院を経て、鳥羽商船高専の教員に。現在は副



開発に携わった「つみログ」など自身の研究を紹介する江崎さん(鳥羽市の鳥羽商船高専で)

みえ ひと 人模様

近年は、海草や藻類の吸収する炭素「ブルーカーボン」に注目が集まる中、海中の藻場の範囲やCO₂の吸収量を可視化する研究もしている。こうした研究には学生たちも携わり、漁業者や農業者、企業、行政など、地域の人々と関わりながら取り組んでいる。起業家育成にも力を入れ、在学中にIT企業を立ち上げた教える子もいるという。

江崎さんは「地域の産業をITで手助けしたい。例えば『プロ野球選手より年収が多い』という世界になれば、漁業や農業に就労したい人も増える。収入につながる、仕事も面白いと思ってもらえるよう、一緒にやっていきたい」と前を見据えた。